

JOMF 派遣医師便り (2020.02)

◆シンガポール◆

コロナウイルスとシンガポール

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

新型コロナウイルスの感染の拡大が続いている。去る2月7日、シンガポールでも、中国に渡航歴がなくかつ既存の患者との明らかな接触歴のない患者さんがみつきり、シンガポール保健省は自らが設定している Disease Outbreak Response System Condition (DORSCON) の警戒レベル (Green, Yellow, Orange, Red の4段階) をそれまでの Yellow から Orange に引き上げた。これは、限定的ではあるが、市中感染があり、日常生活に影響がある (市民、会社、学校などが積極的に対策をとらなくてはならない) という意味である。

Orangeになると、居住者一人一人が感染に対し、更に警戒する意識をもつことが期待される。個人に求められることは、体調が悪ければマスクをして、速やかに医療機関に連絡する、または行くことである。そして、頻回の手洗い、不用意に顔を触らない、この時期に限っては握手をしないなどの衛生的行動である。感染症に対しては、個人個人が注意することがどんな場合にも大切であることが再度強調された。

また、全ての会社では従業員に少なくとも朝夕2回の検温が義務づけられ、発熱など体調不良者は、速やかに医療機関を受診することが求められる。また、会社では自宅勤務を促したり、いくつかのチームにわけるといった、感染がより広まったときのための準備をしなければならない。会社に体調不良な人が訪れた場合には、すぐにその場を立ち去り、受診するよう促さなくてはならない。学校など教育施設では、校外学習や他の学校との交流などのイベントは全て即時延期となった。校内での集会も中止。学校施設に入るときには、もちろん全員検温が必要である。

様々な催し、大人数が集まるイベントはやむをえない事情がない限り、全て延期とされる。やむを得ず、開催される場合でも、会場の換気を良くし、こまめな頻回の清掃を要する。もちろん、参加者全員の名簿が記録されなくてはならない。

2003年のSARSを乗り越え、2009年のH1N1インフルエンザの経験があるシンガポールは、感染症の勃発に備えてきていた。そして、今、全力を挙げて、感染の拡大を封じ込めようとしている。できる限り、患者を見つけようとし、見つけたら隔離し、接触者健診、追跡を行い、その情報を逐次、公表している。これは、さらなる接触者の発見、および感染拡大の防止に役立つことを期待してのことだと思われる。ちなみに、2月1日から、過去14日以内に中国を訪れた人はトランジットを含め、入国が認められなくなっている。

保健省は、頻回に会見を開き、正確な情報伝達に努めている。「中国湖北省では死亡率は2%以上だが、それ以外での患者の死亡率は0.2%であること」、「警戒は必要だが、SARSに比べ死亡率は明らかに低く、むやみに恐れる必要はない」とし、鎮静を図ろうとしている。

ただ、「この感染症の詳細は今だに不明で、全貌がわかるには、さらに時間がかかる」とも述べ、慎重な面も伺える。

また、政府のホームページでは情報が逐次更新され、患者数のみならず、患者の年齢やどの病院にいつ入院し退院したかなどもわかるようになっている。さらに YouTube を使った情報の伝達はアクセスの簡便さもあり、政府の考えがよりよく伝わる工夫であると思える。そこには、疲弊しがちな救急隊を含めた医療関係者への労いも見える。頑張っている姿を知らせることで、誰が悪いなどとスケープゴートを見つける行為を回避し、政府が国民皆と協力してこの難題に立ち向かっているというよい意識づけがなされているように感じる。

疑い例が増えるにつれ、対応する医療キャパシティーの問題が生じてきた。シンガポールの医療システムでは患者は家庭医などの一般クリニックを最初に訪れることになるので、疑いがある場合は、そこから、特別な救急車を呼ぶことになるが、救急車の到着まで数時間かかった例もあるとのことであった。これには既に対策がとられ、患者さん自身で、疑いありと判断した場合には、まずは、最寄りのクリニックに連絡し、医師が疑い例と考えた場合には、患者さんには自宅待機をお願いし、救急車を自宅に向かわせるという方法もとれるようになった。もちろん、さらに緊急性がある場合には、市民が直接、救急車を呼ぶことも可能である。

DORSCON が、Orange になる前から、マスクの買い占めが起こり、品不足のため、既に、市中ではマスクを購入することはほぼ不可能となっている。これに対しては政府が、各家庭に4枚のマスクを無料配布したほか、マスクは体調が悪い時にのみするようにとの勧告を出し供給不足にならないよう努めている^{写真1)}。また、Orange になったことで、食料品やトイレトペーパー^{写真2)}の買い占めが起こり、複数のスーパーマーケットの食品陳列棚が空になるなどの現象も認められた。これに対しては政府系のスーパーマーケットが、備蓄は十分にあるので、買い占める必要はないとのコメントを出し、その後、短期間で落ち着いたようである。



左 写真1) 2月3日の地元の有力新聞 STRAITS TIMES より

下 写真2) 2月7日、ある地元のスーパーマーケット内の食品陳列棚の様子



2月23日の時点での確定患者数は89名である。うち5名は、Critical ConditionでICU入室中とのことだ。この5名の詳細は公表されていない。ICU入室者数は2月上旬から5名前後で変化はないので、患者数に占める割合は減ってきている。また、89名のうち、49人は完全に回復し、既に退院しているとのことだ。

韓国で教会を介しての集団感染が起きたが、小規模ながらシンガポールでも同様のことが起きている。シンガポール政府はさらに患者数が増加することは必至であるとみて、市民に対して、風邪のような症状が出たら、医師の診察を受け、仕事や学校には行かず、人込みを避け、自宅にいるよう注意を促している。また、ドクターショッピングをしないことも伝えている^{写真3)}。これは症状経過がわかりにくくなるのを避けるためと思われる。もちろん、医療関係者には警戒を怠らないよう呼びかけている。

私として個人的には、この疾患は一般の風邪より少し重い程度と楽観視してきていたが、シンガポール当局が、本当に軽症者を含めほとんどの患者を見つけてきているとするならば、未だ、5%以上の患者がICU入室が必要だという状況は、等閑にはできない事実であると思う。なぜなら、近い将来、患者数が更に増えた時に、医療資源が不足する恐れがあるからである。

または、この89名以外に、既にずっと多くの軽症患者が既に市内に存在しているのだろうか。それならば、むしろ、心配は減るのだが。



写真3) 2月20日の STRAITS TIMES より